東京 IPO　特別コラム

２０２５年5月２９日　Vol.２４３

いつまで続く米騒動、出揃った６月ＩＰＯ銘柄

全体相場が戻り歩調を辿る中でグロース指数も上昇。とりわけグローストップ２０指数で最も時価総額の大きな創薬ベンチャーであるＧＮＩ（２１６０）が開発中のＢ型肝炎に起因する肝線維症治療薬Ｆ３５１の中国でのフェーズ３への治験進捗をリリースして大きく株価が上昇し、株価低迷状態の他の創薬系企業の株価にも影響を与えつつあります。

また、このところの市場での話題は令和の米騒動で生じた米価の急騰の話。農水大臣の交代にまで至り、ワイドショーなどメディアでの報道が連日続いています。消費者にとっては確かにお米の価格が上がるのは気になるところですが、卵やめん類、肉類、野菜、果物など軒並み値上がりしていますのでお米だけが安いというのは考えにくい訳で、農業従事者のことを考えるとある程度は致し方ないかと思われます。７ 月の参院選を前に農協も含めた農政問題でこの先も話題となるのか、備蓄米（つまり古米）の放出がイオンなど小売店を通じて実行された後の動きには引き続き関心が集まりそうで、株式市場でも関連銘柄（米穀卸の木徳神糧、ヤマタネ、伊藤忠食品、精米機のエムケー精工、米袋ののむら産業など）探しが活発化しています。中にはソルクシーズ（４２８４）のように株主優待にお米を贈呈するとした銘柄にも関心が高まる始末。本業以外に農園事業に注力しているエスプール（２４７１）に加え、タカミヤ（２４４５）、大日光エンジニアリング（６６３５）など地元との関係もあって取り組む企業も見出せ、これらは低迷状態の株価に刺激を与える可能性を秘めています。

グロース銘柄中心の中小型銘柄への物色気運高まりの中で直近のＩＰＯ銘柄をチェックすると昨年 10 月以降のＩＰＯ銘柄５３銘柄のうち公開価格を下回っている銘柄が１０月２２日ＩＰＯのガーデン（２７４Ａ）やリガク（２６８Ａ）など5月２８日現在で１５銘柄存在。中には前号で取り上げたオルツのような決算上の不備があったケースもあるなど、それぞれの事情があっての株価の低迷ながら見直しの余地があるとも言えます。まず大半のＩＰＯ銘柄の特徴は業績の先行き不安感が残り、投資家の期待が裏切られることがあるため投資家の慎重なスタンスが伺える点があります。この点は決算発表で徐々に評価が定まると考えられます。また各社とも上場後にＩＲには努めていますが、認知度が低いため評価が高まらないという現実があります。投資家の皆さんも知名度がないＩＰＯ銘柄への投資は手控え気味とならざるを得ません。とは言え、この結果、中には成長期待やバリュー価値のある銘柄もあり、裏を返せばこれらは見落とされた状況にあるとも言えます。こうし状況を投資チャンスとみなせば、今後は徐々に見直される可能性があると言えそうです。現にインターメスティック（２６２Ａ）やＭＩＣ（３００Ａ）、ｖｉｓｕｍｏ（３０３Ａ）など数銘柄が低迷状態から脱し、それぞれ評価され始めています。

こうした状況の中で、6月にはレント（３７２Ａ）、エータイ（３６９Ａ）、北里コーポレーション（３６８Ａ）などユニークな６銘柄がＩＰＯしてきます。いずれも黒字経営でユニークなビジネス展開を続けている有配銘柄。やや停滞気味できたＩＰＯ市場に活気が採り戻るものと大いに期待されます。

（東京ＩＰＯコラムニスト　松尾範久）